

藝園草牧

第三卷。第二号

昭和三十年二月一日（毎月一回）發行



夕張郡長
雪印種畜林試會社
中興町地農場

雪印種畜林試會社

歐米隨想

藤忠
工良

昭和二十九年秋、三月月に亘つて欧米九カ国を旅して、農業各般にわたる見学をした次第ですが、言葉が不自由であり且つ一人旅で案内者も特別になかったが、できるだけ広く見てピンと感じた事を断片的にお話ししよう。

先ず欧米各国の農業を見て、妙な言い方であるが、極めて粗放的な集約経営であると感じました。一例をあげると麦を刈るのに機械で刈る、鎌で一株ずつ刈取るように丁寧なことはなく、相当に落穂が多い。また馬鈴薯の収穫も機械で行うので掘残しの薯もわが国よりは確かに多い。しかし収穫直後に牛を放牧したり、綿羊、豚、鶏等を放つて残りなく利用する点は洵に集約的であるといえるでしょう。こんな具合に各国とも如何にすれば生産コストを安くできるかを常に研究工夫して、圃場の残物は家畜の力で掃除をさせかつ生産をあげている。トマト、キャベツ等の収穫跡地に家畜を放牧する情景も幾度か目に入つた。

北米の農村を見て思ったことは、部落全戸数が丁度一つの農場を経営しているかの如く、トマト作りの名人はトマトを重点とした経営を、玉葱作りの選手は玉葱を、ピートの得意な人はピートを、家畜の大家は家畜を沢山飼っている。ピートの収穫と運搬はピート会社から来た機械で掘取り、ピ

ートの葉を畑に残して根部を運搬する。その葉は家畜を沢山持つている農場との話で一エーカー何弗なら売る、買うの商談が出来ればその畑に家畜を放牧して全部利用するのである。葉を掻集めてトラックで運搬したのでは人件費がかさみコスト高となるのでできない。こんな具合に相互に利益を分かち、特技を発揮し合う社会があるのである。

又国土の総合的な利用法にしても一番良い土地には蔬菜栽培加工事業とか、亜麻事業、甜菜糖業等が興り、これに次ぐ土地は草地としての肥培管理を行つて家畜を飼う。一番悪い条件の土地には盛に植林をして、スコットランドの植林を現地で見ている。スコットランドの植林を現地で見たが、日本の落葉松と歐洲の落葉樹との一代交配種が最も優秀であるのでこれを盛に植林している。

オランダは一番高い処は海水面で、これに次ぐのが大排水路、最も低いところは小排水路であるという地帯で農業を行つており、家畜の放牧も電気牧柵でなく排水路が柵に代つている。オランダのアムステルダムの見物が観光バスでなく観光ボートであつたこと等も印象的であつた。

デンマークでは北海道から実地研究に行つて居る中流農家に二泊して経営状況を見たのであるが、畑二五町歩、乳牛四〇頭、

豚四〇頭、鶏三〇〇羽程度であつて、これを三人の働き手でよくこなしている。個々の牛を見ると特別立派なものではなく粗放といえは粗放ではあるが、牛の栄養は申し分なく全体の収益と一人当りの稼ぎ高はわが国の農家と比べものにならぬほど多い。経営も作業も生活も科学的であり合理的に能率化されている。農機具はもろろん進歩しているが小農具も工夫改善している。例えばレーキの如きも日本にあるものの如く小さなものではなく、こちらの三、四倍の大きいレーキを引いて草を集めたり、また手鎌にしても日本では神代時代から直角ときまつているが、無益な力を省き能率が上るように角度も力学的になつている。

生活の面では地下室に罐詰類が沢山あり、清水と温湯は何時でも出る。朝食はオートミールであるが、熱を加えないオートミールに牛乳をかけて食べるので洵に不味い。しかし熱を加えると栄養分が損耗するのでかようにしている。どうしても美味とはいわれないので深沢青年に聞いてみると、同君も来た当時は喰べにくかつたが今は慣れて何とも感じなくなつたといつていた。こんな点も食生活の科学性と能率化との香りがする。

ある日曜日ロンドンでパート見物、入浴、休養等に当てた日の感想であるが、パートの玩具売場に立つて、プラウ、モアリ、レーキ等の玩具の外おもちゃ時計の各種のパーツ類を見付けて、なるほど日本の玩具には見られないもので、子供心に農機具や機械と遊ぶことを教育するものかと思

心した。洋食を常としてから丁度一カ月半位経過していたので、体重の変化を見ようと、台秤に上つたが目盛りが動かない。注意書を見ると一セントの金を入れて呉れと記してあつた。つぎにホテルに帰つてラジオのスイッチを入れてもこれまた音がしない。一〇セントの金を入れれば、一〇セント分の時間だけ聞えて来る仕掛けになつてゐる。こんな点も日本の旅館では想像もできぬほど事務的に割切つてゐる。

北海道を發つ前にイタリーとアメリカへ行つたら、毎年赤クロバー種子を輸入しているのその生産状況を調べて欲しいとの要請があつたので、赤クロバーの話聞いたが近年はその大部分がルーサンに置換えられてゐるとの事で、行けども行けどもルーサン畑が続き、ついぞ赤クロバーの採種地を見ないで了つた。赤クロバー種子の生産地は一部の地帯に限られて、土地改良と地力の増進に伴なつてルーサンが文字通り牧草の王座を占めた証拠をヨーロッパでもアメリカでも見せつけられた次第です。

わが国ではケール(羽衣甘藍)は園芸用のものをわずしかしか見た事がないが、ヨーロッパでは巨大なケールを栽培して重要視しているのを見て、冬の長い北海道の家畜、とくに養鶏等には是非とり入れたいものと感じた。

その他濯洗設備、霜害予防設備、薬剤撒布機、その他農具各般に亘り非常に能率化されている点を羨しく感じたが、いずれ機会をもつてお話し致します。

(北海道生産農協連参事)